【別紙１】

小笠原村立小笠原小学校令和４年度授業改善推進プラン

小笠原村小笠原小学校
校長　　横山　優美

（１）令和３年度の取り組み状況に関する総括

学力調査では、令和３年度で学習した内容が出題されており、学校全体としては、令和３年度の学習内容においての基礎的・基本的な知識・技能の定着に課題が見られた。

村の学力調査では、教科全体の平均正答率については、目標正答率と比較して、約０．５％上回っている。習熟の程度に応じた指導方法や指導内容等の工夫により、一定の成果が見られたといえる。ただ、全国平均正答率と比較すると、下回る教科や学年が見られ、改善が必要である。特に３年生が初めて学習する社会科と理科については、例年正答率が低い結果となっている。

また、「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか（学校の授業の予習や復習を含む)」という問いに「はい」と答えた本校の児童の割合は、全国の割合と比較すると大きく上回っていた。「普段（月曜日から金曜日)、１日当たりどれくらいの時間，勉強をしますか」に対して、「全くしていない」と答えた児童は、０％という結果になった。これらの結果から家庭学習に対する意識が高まってきたと言える。今後も本校の「家庭学習のすすめ」を基に、家庭と連携して家庭学習を推進する。

①村学力調査の概要

時期	対象学年	教科等	
５月	２～６年	２・３年　国・算 ４～６年　国・社・算・理	３～６年 学習・生活に関する意識調査

②村学力調査結果

教科全体の平均正答率（%）について　※（　）内は、全国の平均正答率との差

	国語	算数	社会	理科
２年　R３	70.2（—6.7）	77.7（－5.3）	－	－
R４	79.8（＋0.3）	78.1（＋0.1）		
３年　R３	75.5（＋3.4）	78.5（＋3.0）	－	－
R４	67.2（＋0.1）	73.8（－0.1）		
４年　R３	69.1（—0.2）	75.1（＋4.2）	67.2（－1.6）	64.1（－4.8）
R４	70.7（＋2.7）	78.0（＋4.9）	57.5（－10.8）	69.1（－16.6）
５年　R３	69.7（＋1.9）	60.7（—0.4）	54.2（－0.3）	54.1（－14）
R４	71.7（＋3.7）	68.3（＋7.9）	72.1（＋3.8）	69.1（＋5.9）
６年　R３	64.7（＋2.2）	68.0（—0.8）	65.6（＋4.9）	64.1（－2.1）
R４	53.7（－8.3）	54.5（－9.0）	58.1（－11.4）	56.1（－12.1）

R３…令和３年度調査結果　R４…令和４年調査結果

③全国学力学習状況調査の概要

時期	対象学年	教科等
４月	６年	国・算・理

④全国学力学習状況調査結果

【算数科全体の平均正答率及び領域別の正答率について】

	本校（%）	差	都（%）
教科全体の平均正答率	６３．０	－４．０	６７．０
（前回）	７５．０	＋１．０	７４．０
数と計算	６６．７	－５．４	７２．１
（前回）	６７．９	＋２．５	６５．４
図形	７２．０	＋３．４	６８．６
（前回）	５７．１	－６．６	６３．７
変化と関係	４９．０	－２．３	５１．３
（前回）	９２．１	＋１２．３	７９．８
データの活用	６４．０	－８．４	７２．４
（前回）	７９．０	－０．５	７９．５

領域別に見ると、「図形」では、都の平均正答率を上回ったものの、「数と計算」「変化と関係」「データの活用」については、課題が見られた。「図形」については、令和２年度まで本校の課題となっており、体験的な学習を取り入れた指導の充実を図る等、児童が実感を伴って理解することができる指導の工夫を行ってくる等の対策に取り組み、その成果がこの結果から見られた。「数と計算」「変化と関係」「データの活用」については、基礎的な学習内容の定着を図るため、「わかる」「できる」を体感できる授業を行っていくことで、課題を改善していく。

【下位層から上位層までの児童の割合】

	本校（%）	差	都（%）
Ａ層	２４．０	－１４．７	３８．７
（前回）	３８．１	－１２．６	５０．７
Ｂ層	５２．０	＋１６．２	３５．８
（前回）	５２．４	＋２０．６	３１．８
Ｃ層	２０．０	＋２．０	１８．０
（前回）	４．８	－８．８	１３．６
Ｄ層	４．０	－０．９	４．９
（前回）	４．８	＋０．９	３．９

※各層は、正答した問題数ごとに４分割し、それぞれの正答した児童の割合を算出した。

学力調査結果における下位層から上位層までの割合、教科の内容及び観点別の正答率を令和３年度と比較し、本校における学力の状況や経年変化を把握・分析すると、本校と都における下位層から上位層までの割合を比較すると、令和４年度調査では、Ｄ層の割合は、都の割合に比べて少ないことが分かった。

また、令和４年度調査では、Ｃ層が全体の２割を占めていることから、下位層の児童の学習への意欲を高める指導等の工夫が必要であり、下位層を中位層へ引き上げる指導については、継続して取り組んでいく。

「基礎的・基本的な学力が定着しない」ことの背景には、学習内容を定着させるための十分な反復練習や活用ができていないこと、主体的に学ぶ意識が薄く、受け身の姿勢で学習に臨んでいることなどが考えられる。また、長年、学級担任の裁量による学級経営が行われ、学習や生活について学年の系統立てた指導がなかったこと、特色ある教育を重視した教育活動により、基礎的・基本的な学習の定着が図られなかったこと、家庭の学力向上に対する意識の低下等が挙げられる。そのため、令和３年度から全教員が共通理解の下、学力向上に関する取組（重点８項目）について取り組んでいる。

（２）授業改善のための取組について

小笠原村教育委員会教育目標実現のための授業改善に関する取組の重点

○　授業ＵＤの徹底

➡「わかる」から「できる」を**体感する授業**の推進

①「学習指導の充実を図るための方策」

授業 UD、家庭学習、振り返り指導の確立、基礎・基本を徹底し、学ぶ意欲の向上を図るために２つの取り組みを行っている。１つは、「学力向上に関する取組（重点８項目)」を定めて指導をしていることである。

２つは、「分かった、できた」という児童の学力と実感を育むために、校内研究では、研究主題を「主体的な学びの実現に向けた授業づくり」とし、副主題を「『わかる』『できる』につながる算数の授業を目指して」として、授業改善に向けて研究を進めている。

学力向上に関する取組（重点８項目）による取り組み

重点項目１　学習のきまり

令和元年度に、児童が学習に取り組む準備をできるように指導したり、学年が変わっても年度当初にスムーズにスタートができるようにしたりするために、「学習のきまり」を作成した。学習用具、授業の約束についての掲示物を教室に掲示し、年度当初や学期当初に児童と確認している。

重点項目２　生活のきまり

令和元年度に、教員一人一人の考えではなく学校全体で児童一人一人を指導できるようにするために「生活のきまり」を作成した。教室に掲示し、年度当初や学期当初に児童と確認している。

重点項目３　家庭学習のすすめ

令和２年度、家庭学習について保護者にアンケートを行った。宿題の量や内容については、各担任による差があり、学校として系統的に指導する必要があることが分かった。そのため、家庭学習のすすめを改善し、内容や取り組み方については、保護者会等で家庭との連携を図っている。

重点項目４　授業・教室のユニバーサルデザイン化

児童の視点から、教室が変わっても、教科が変わっても混乱がないよう、授業の在り方や適切な教室環境を整理する必要がある。そこで、授業や教室環境におけるユニバーサルデザイン化を推進し、全ての児童にとって「わかる」「できる」授業を実現していく。

授業の流れを提示

タイムタイマーの活用

わかりやすい板書の工夫

重点項目５　学びの過程のデザイン

本校の児童の実態として、主体的・対話的で深い学びへに向けて、基礎学力を向上させる必要がある。そのために、学びの過程のデザインを活用した授業を継続することで、児童の基礎・基本の定着を図っていく。令和２年度より、一単位時間の授業の進め方を示した「学びの過程のデザイン」を活用している。

重点項目６　スキルタイム

昼食・清掃後から５校時開始までの１５分間を、基礎基本の定着を図る時間を「スキルタイム」とする。令和３年度２学期からは、オンライン学習（ドリルパーク　ベネッセコーポレーション）と東書 WEB ライブラリーの問題集（紙媒体）を併用し、学習を進めている。

重点項目７　評価規準

年間指導計画を基に、教師が計画的に指導し、評価を基に、児童の成果と課題を確認する。また、児童と保護者が明確に評価の視点を理解し、学習の成果と課題を把握する。

重点項目８　児童による自己評価・授業評価

「わかる授業」、「できる授業」を実現するためには、日々の授業改善が必要である。その際、教員が自ら授業を振り返るだけでなく、児童が授業をどうとらえているかを知り、それを授業改善に役立てることが大切になる。また、授業は教員と児童が共同してつくるものであるという意識を児童に育むことを目的とする。

校内研究を通しての授業改善

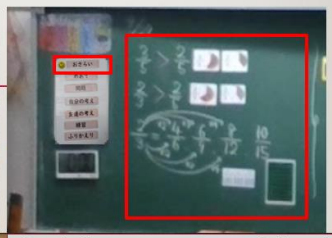
研究主題「主体的な学びの実現に向けた授業づくり

～『わかる』『できる』につながる算数の授業を目指して～」

「わかる」

既習内容の活用を考える手だてとしながら、課題解決できること

既習内容の活用を促す発問



導入時「おさらい」で既習内容の確認

「できる」

数学的な表現を用いて、相手に説明したり、伝えたりできること

ペアやグループ交流で相手に伝える

ホワイトボードを活用し、全体に考えを伝える

②「『指導と評価の一体化』の実現を図るための方策」

指導と評価の一体化を図るためには，児童一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視し、教師が自らの指導のねらいに応じて授業での児童の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくことが大切である。すなわち、学習指導要領で重視している「主体的・対話的で深い学び」の視点からの 授業改善を通して各教科等における資質・能力を確実に育成する上で，学習評価は重要な役割を担っている。

これらのことから、本校では校内研究の算数科を中心に以下の方策を徹底して行い検証を進めていく。

・算数の中では、目標（ねらい・めあて）を示す活動を計画的に取り入れる。

・算数の授業で、学習内容を振り返る活動を計画的に取り入れ、次の授業に活かす。

③「義務教育9年間の学びの連続性を意識した小中一貫教育推進のための方策」

第６学年を対象とした国の学力調査（児童質問紙調査）において、「授業の内容がよく分かる」と回答した児童の割合は約 80％と、国の平均の 75％と比べて上回った数値となり、本校児童が学習に意欲的に向かっていることや、授業中には理解できている姿が読み取れる。一昨年度の同様の調査では「授業の内容がよく分かる」と回答した児童の割合は約 35％と、都の平均の約 70％を大きく下回っていた。一昨年度の結果から、昨年度から「わかる」「できる」授業を目指し、授業改善を推進してきた。今年度の結果から本校の取り組みが、成果として表れてきたと言える。ただ、国の学力調査における学習面での結果においては、国や都の平均正答率を下回っており、基礎的・基本的な知識及び技能の定着に課題が見られる。授業中に「わかる」と思えていても、問題に正答できていないことや新しい単元も積み重なりづらく、学力が上がらない実態があることが分析できる。これらのことから今年度も本校は基礎的・基本的な知識及び技能の定着に重点を置き、授業研究を進めているところである。

基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図るためには、授業における「つまずき」を解消することが重要であり、そのためには「つまずき」ポイントを明らかにする必要がある。小学校６年間のみの課題としてではなく、算数科・数学科として９年間を見通したつまずきポイントを明らかにすることで、基礎的・基本的な知識及び技能の定着に結び付けていく。昨年度、年間指導計画では９年間を見通した、つまずきポイントを明らかにし、今年度、授業の中で検証している。今後、算数科だけでなく、全ての教科・領域で検証を進めていく。